



Title	坊守が考える寺院の社会的役割：北陸地域におけるグループインタビュー調査から見る
Author(s)	趙, 梦盈
Citation	共生学ジャーナル. 2023, 7, p. 47-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90812
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文

坊守が考える寺院の社会的役割

—北陸地域におけるグループインタビュー調査から見る—

趙 梦盈*

Bōmori's view of the social role of temples

Based on group interview survey in the Hokuriku region

Zhao Mengying

論文要旨

日本における仏教寺院の衰退要因を探求する際に、寺院が変化する時代に応じて社会的役割を果たしていないことが判明された。よって、現代社会における寺院の社会的役割を理解するにあたって、寺院運営者の視点が欠かせないと考えた。また、事実上寺院管理者である寺庭婦人はあまり研究されていないことから、本研究は彼女らの考え方を明らかにしようとした。その際に、北陸地域における3つの真宗寺院の坊守を研究対象とし、彼女らが認識している自坊の運営状況、坊守像、地域における寺院像について、グループインタビューの手法を用い、調査を行った。その結果、坊守たちにとって、寺院の持つ社会的役割は関係者のネットワークと地域社会の接点であり、かかわってくる人の「心の拠り所」であることがわかった。

キーワード 仏教寺院、坊守、社会的役割、ネットワークの接点

Abstract

While exploring the causes of the decline of Japanese Buddhist temples, the need for the social role of temples to change with the changing times has been noticed. On top of that, the viewpoints of Bōmori, those who have not yet been fully researched. This study aims to clarify their perceptions of the management of their temples, the ideal of Bōmori, and the ideal of temples in their communities through group interviews with Bōmori of three Shinshū temples in the Hokuriku region. The result indicates that for Bōmori, Buddhist temples serve as place to connect with others in local communities and provide a source of comfort for people who are involved.

Keywords: Buddhist temples, Bōmori, social roles, network contacts

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程；yumenonakayue@gmail.com

1. 佛教寺院の可能性と限界

2000年以後、日本では佛教の福祉活動や社会貢献活動が活発になってきている。様々な領域で、各宗派の僧侶により社会的弱者への援助や社会問題解決への協力が市民と研究者の目を引く（稻場・櫻井 2009; 櫻井 2011; 秋田 2011）。現代日本社会福祉における諸問題の改善と、共生社会の形成に向けて、佛教と寺院への期待も厚い（北川 2011; 長上 2012）。

なぜならば、佛教は救済を語る哲学であるため、福祉との間に親和性を持つと広く考えられ、特に大乗佛教においては慈悲の心により、他者救済を優先する「菩薩の道」が提唱されている（三友 2011; 朴 2012; 宮城 2013）。日本佛教も確立された当初から、多種多様な形を通して、継続的に福祉活動が行われた（清水 2003; 高石 2005; 藤森 2014）。これらの福祉活動の多くは、寺院でなされ、少なくとも寺院という場所と何らかの関連性を持っており。現在にも日本における佛教寺院の数はコンビニを上回り、7万軒以上あるとされている（中島 2005）。その上に、量だけではなく、これらの寺院はある程度整備されていたインフラと、比較的に広い空間を有し、長年地域に鎮座しているため、地域の生活者にとって、佛教寺院は信頼しやすく、アクセスしやすい場所でもある。つまり、日本の佛教寺院は福祉活動、社会活動を行うのに、思想的な背景と伝統、また物理的な条件が揃えられている場所であると考えられる。

しかしながら、現在、日本の佛教寺院は①「人口減少と地域過疎化」②「佛教寺院内部の諸問題（檀家制度、世襲制、葬式など）」③「宗教離れ・佛教離れの社会意識」（島田 2010; 水月 2016; 松本 2017）といった理由で衰退している。さらに筆者が2019年に行った研究では、この3つの理由の背後に、佛教寺院が時代とともに変化する社会意識と生活者の需要に対応できていないため、現代社会における社会的役割が喪失したという根本的な要因があると主張した（趙 2019）。

これら寺院衰退理由の中に、「檀家制度」と「世襲制」は日本佛教教団体制の特徴とも認識され、日本佛教世俗化の証とされている。それらにより、日本の佛教寺院は、初期佛教のサンガや他のアジア諸国にある寺院と比べれば、より複雑な寺院生態が形成されている。

2. 日本における「檀家寺」と「寺庭婦人」の由来

日本における最初の仏教寺院は蘇我氏により 6 世紀末から 7 世紀初頭にかけて造営された飛鳥寺（法興寺）である。それから千年以上の年月を経て、仏教寺院はもはや日本文化、景観、社会生活の一部分となっている。櫻井と川又（2016:4）によれば、現在、日本の仏教寺院は大きく 3 種類に区分することができる。すなわち、①国家や貴族の祈願寺、②勧進聖や講によって栄えた庶民信仰の寺、③市中・村落の葬儀寺や道場である。

その中に、③市中・村落の葬儀寺や道場のほとんどは「檀家寺」とも呼ばれ、日本独特な寺院形式である。檀家寺の起源は室町時代にさかのぼることができる。その後、江戸幕府は寺院に国民全員の戸籍を管理させ、キリストンではないことを証明する「寺請制度」が確立された。したがって、檀家寺は幕府支配の端末として、日本中にはほぼすべての集落に建てられた。その一方、檀家寺に従属する人は家を単位に、従属する寺院へ経済的援助をすることが義務付けられ、その寺院の「檀家」と呼ばれる。

さらに明治時代になると、「今僧侶肉食妻帯蓄髪等可為勝手事」（これ以後、僧侶が肉を食べること、妻を娶ること、髪の毛を伸ばすことなどを許す）という太政官布告の発令により、日本仏教の世俗化が全面的に進み、戦後になれば、「肉食妻帯」はごく一般になり、日本の僧侶は在家信者と同じ生活を送るようになった。そのために、寺院を住職の子供に継承されるという世襲制も確立されたのである。

このような背景のもとに、僧侶の妻である女性たち、いわゆる「寺庭婦人」の存在が徐々に日本社会で顕在化されていく。筆者のフィールド調査経験から見れば、彼女らは、一般家庭の主婦と同じく、家事、育児をこなす上に、寺庭管理、經理事務も担っていることが多い。さらに檀家、近所、他の寺院との付き合いなど、住職より寺院雑務の大半を担い、寺院管理者の一人であるとわかった。

このように、実質上寺院を管理している女性は、日本仏教寺院の「檀家制度」と「世襲制」が成り立つ重要な条件ともなっている。しかも、葬式法要など法務に精力を注ぎ、宗教的な存在とみなされる住職より、寺庭婦人は世俗社会と生活者の距離が近い。そのために、寺院が果たす社会的役

割は彼女らが自身と寺院をどのように認識しているかと大きく関わる。

3. 寺院の社会的役割

寺院の社会的役割について様々な研究がなされていた（木越・東館・山下・徳田・藤枝・藤元 2017; 小川 2019）。しかし、それらの研究では、「寺院の社会的役割」が定義されず、自明な概念として使用されていた。そのために、筆者はまず「寺院の社会的役割」の定義と内容について少し議論したい。

社会的役割は曖昧かつ多義な社会学概念の一つであり、多くの学者により議論され、社会学とその隣接科学において頻繁に使用されている。三沢（1987）の見方によると、社会的役割は個人と社会の接点であり、個人は役割を通して社会から必要とされ、また、役割を通して社会に働きかけるのである。もちろん、ここで討論されているのは個人と社会の間に、パイプのように存在する社会的役割であるが、個人によって構成される「組織」にも、社会的役割が有していると考えられる。

現代経営学者 Peter Drucker (1973) は、あらゆる組織は個人の社会貢献できる手段であり、自己実現の手段でもあるといった。言い換えれば、組織の社会的役割は個人と社会を結び、個人と社会の相互行為が実現できる場である。このように、個人、組織、社会は社会的役割によって結ばれ、有機的に組織されると言えよう。

つまり、寺院の社会的役割を探求する際に、必ず、「寺院の中にいる個人の自己実現」と、「その自己実現は寺院という場を通してどのように、社会の需要に答えているか」という両方を見なければいけない。

しかし、今まで仏教寺院の社会的役割についてなされた研究は、僧侶に注目した内容が非常に多い（手打・原 2014; 朴・王・孫・稻場 2018）。理由としては、歴史的に見れば、仏教が男性主導の宗教であるうえ、日本以外の地域において、いまだに戒律によって、結婚できないのがほとんどだからである。むしろ、僧侶の伴侶としての女性は仏教内部からタブー視されていた。したがって、寺庭婦人は一寺院にとって重要な運営者であるにもかかわらず、その姿が気づかれにくくなってしまい、複数の研究者が、今ま

で仏教の社会参加や社会貢献に関する諸研究はジェンダーという視点が抜け落ちていると指摘した（横井 2012; 鈴木 2022）。

そのために、本研究は日本佛教寺院の中に隠れがちな寺庭婦人に目を向け、彼女らは寺院の中に自分の立ち位置をどのように認識し、どのような働きによってそれを実現しようとしているのかと、寺院の地域社会に果たしている、また果たすべき役割について、彼女たちはどのように考えているのかを探求する。さらに、得られたデータに基づき、寺院の社会的役割を試論する。

4. 研究対象者

4.1 浄土真宗の寺庭婦人

令和 3 年の宗教年鑑によれば、日本佛教各宗派の中において、浄土真宗⁽¹⁾の教師数と信者数は最も多いため、当宗派は日本社会に他宗より、大きな影響を及ぼしていると認識できる。そのため、本研究は浄土真宗の寺庭婦人、通称「坊守」の女性たちに注目した。

真宗坊守の起点は開祖親鸞の妻恵信尼^{えしんに}に遡ることができる。親鸞は師である法然上人の命令に従い結婚し、妻帯が仏道を妨げないことを唱え、非僧非俗と称した。その後、親鸞は妻と共に一般的な出家教団と異なる念佛教団を形成し、夫婦で寺院を運営する伝統を築き上げた（宗教年鑑令和 3 年；遠藤 2000）。そのような理由で、真宗においては、住職の妻が寺院の守り人という意味で、「坊守」と尊称されている。つまり、他宗派の寺庭婦人より真宗の「坊守」は最初から「宗教者」の一面が備えられ、寺院の運営に積極的に携わることが認められている。

また、寺庭婦人についての論考が少ない状況の下に、十分とは言えないが、真宗の坊守については一定数の研究がなされている。その中に、宗勢調査に基づき坊守の役割を論じる研究や、社会心理学的アプローチで坊守自身の意識を考察した研究が存在する（窪田 2006；横井 2012）。しかし、これらの研究は、量的な手法を用い、マクロ的な視点で坊守像が描かれていため、一個人である坊守の考え方や、その考え方まで至った経緯ははつきり

見えてこない。よって、本研究は真宗の寺庭婦人である「坊守」にフォーカスし、質的研究手法を用い、個人としての坊守の考え方を把握することにした。

4.2 真宗王国における「坊守」

本願寺第8代門主蓮如が吉崎の地を拠点に布教活動を始めたことがきっかけとなり、北陸地方に本願寺の勢力が急速に広まった。現在も北陸地方は「真宗王国」と称されるほど真宗篤信地域である。

また、仏教的要因以外に、人口流動の視点からみても、北陸地方は非常に特徴的である。現在、北陸は他の日本地方自治体と同様に、人口流出が増加傾向にある。しかし、三大都市圏から300km圏内にあり、ビジネスにおける日帰り行動は十分可能な距離であることと、製造業基盤を有しているため、雇用の機会は少なくないことから、北陸地域では、速やかな過疎化は発生していない。むしろ近年、住みやすいと思われ、大都会の生活に疲れた若者がUターン、Iターンといった形で帰ってくるケースも増えている⁽²⁾。以上の理由で、本研究は北陸地方から研究対象者を選出した。

筆者は2020年から、北陸地方でフィールド調査を重ね、そこから3軒の寺院を選出した。この3寺院は立地から、それぞれ「町の寺院（以下A寺）」「里の寺院（以下B寺）」「山の寺院（以下C寺）」と分類できる。一方檀家数から見れば、3寺院の規模は「町の寺院」>「里の寺院」>「山の寺院」というようになっている。また、現在の運営状況については、A寺が寺院の定例の仏事法要以外にも付属の幼稚園を経営しているのに対して、B寺は寺院単位の兼業はないが、成り行きで地域住民がよく出入りし、寺院で行われる報恩講などの行事にも一定数の参加者が確保できる。最後のC寺は中山間地域に位置しているため、過疎化の影響を受け、他の活動どころか、寺院の仏事法要さえ思うようにできなくなり、寺院を護持するために、住職夫婦ともに兼業している。つまり、この3軒の寺院の運営様式も、現在日本中の檀家寺に典型的である。

また、3寺院共に先代住職の妻である大坊守と、現在住職の妻である坊守が同居しているため、計6人の坊守を研究対象者としての同意を得られた。寺院、特に檀家寺はどちらかというと、自営業に近い運営形式をとっているため、先代住職の死亡により、住職と坊守の同時交代が発生するが、

その時点で先代坊守がまだ健在する場合、自動的に大坊守になるけれど、寺院管理にはまたある程度、参与することが多い。そのために、大坊守も現坊守と同様にみなすべきと筆者は考えた。さらに、一般的には大坊守と現坊守は20年前後の年齢差があり、学歴の差もあるので、両方とも研究対象者にすれば、そういう差異から生まれている観念の違いも分析できるというメリットがある。そのために、本研究では、大坊守と現坊守両方を研究対象とする。

表1 インタビュー協力者のプロフィール

研究協力者	年代	最終学歴	出自
町の寺院 A寺	アさん	70歳代	通信制短期大学
	イさん	50歳代	大学
里の寺院 B寺	ウさん	80歳代	中学校
	エさん	60歳代	大学
山の寺院 C寺	オさん	70歳代	高校
	カさん	50歳代	大学
			一般家庭

5. 調査方法・調査内容・分析方法

安梅（2004）によれば、グループインタビューは力動的な当事者間のやり取りから、自然に近い状態で、生の声を通し、より真実に近い情報を得られる質的研究方法とみなされている。また、インタビュイーの意見交換によって、その場で活発な議論が行われ、提供された話題を深められることも考えられる。さらに、対面のグループインタビューは言語情報だけでなく、対象者発言の仕方、表情、その場の雰囲気といった豊かな情報を短時間で得ることが可能である。以上の理由で、本研究はこの方法を使用することとした。それに加え、本研究の場合に、最初にコンタクトをとれたB寺のエさんは、非常に本研究に興味を示されたため、仲介者役として、すべてのインタビューに参加し、グループインタビューを成立させた。

また、インタビューの質問も姑である大坊守と嫁である現坊守の間に利

害衝突が顕在化しないように設定することを工夫したため、より妥当的なデータを獲得できたと言える。

2021年8月17日、21日、23日に、それぞれの寺院で、1グループにつき2時間前後のグループインタビューを実施し、対象者らの承諾を得てICレコーダーを使用し、音声を記録した。

前述したように、寺院の社会的役割を探求する際に、必ず、「中にいる人々の自己実現」と、その自己実現はどのように「寺院という場」を通して、社会の需要を答えているかを総合的に見なければならない。そのためには、本研究はまず、寺院の中にいる坊守について、以下2つの話題（インタビューガイド）を設定した。

- ①「坊守」とは？
- ②坊守としての今の活動と仕事

つまり、この2つの話題を用い、坊守たちは、寺院の中に自身の立ち位置と役割をどのように認識しているかを聞き出し、また、自分が認識している「坊守像」は、どのように、自分の活動と仕事を通して実現しているかを探求する。

また、寺院と地域社会の関係性について以下2つの話題を設定した。

- ③地域社会にとって寺院はどのような存在か？
- ④寺院でどのような活動をしているのか？またこれから寺院で何をやりたいのか？

この2つの話題を通して、坊守たちが考えた地域における寺院像を描き出し、また、その理想の寺院像が実現するには必要な要素、直面する障壁、さらに障壁を乗り越える手段などについて坊守たちの持つ将来ビジョンを明らかにしたい。

1グループのインタビューの終了後、速やかに逐語録を作成した。また、本研究は坊守という寺庭婦人を全体的に把握すること目的にしているため、3グループから得られたデータを一括し、分析対象とした。4つの話題に沿って、総合的に分析し比較を行う。

分析方法は定性的コーディングを使用する（フリック 2016:371）。分析の手続きは村社（2018）に参照し、次の3段階に分けられる。①逐語録から、提供した話題：「「坊守」とは？坊守としての今の活動と仕事。地域社会にとって寺院はどのような存在か？寺院でどのような活動をしているのか？」

またこれから寺院で何をやりたいのか？」に関連している部分を抽出し、適切な長さに区切り、「コード」を生成した。②「コード」を整理し、意味が類似するコードを束ねて「サブカテゴリー」に分類し、さらに「カテゴリー」へと統合した。③3段階の作業を常に繰り返し、微調整を行った。

最後に、データ解釈の厳密性の要請に応えるように、継続的に「コード」「サブカテゴリー」「カテゴリー」の内容、分類、命名を検討し、分析の結果を調査協力者⁽³⁾に確認してもらい、妥当性と信頼性を高めた。

倫理的配慮

本研究は大阪大学人間科学研究科倫理委員会の認証を得て実施した。研究対象者を選出した後に、依頼書を発送し、了承をもらった。インタビューを実施した当日に、口頭で本研究の目的、また、協力することは自由意志であること、さらに、研究結果を公表する際に、協力者のプライバシーを保護し、特定できないように寺院の名も出さないことを説明し同意を得た。

6. 結果

インタビュー内容から、提供された話題に関する発言内容が 289 抽出され、一次絞りによって、173 コードにまとめられた。またこれらのコードをさらに絞り、最終的に 139 コードが得られた。最後にこれらのコードを 13 のサブカテゴリー、さらに、【寺院の運営状況】【坊守への認識と具体的な仕事】【寺院についての思いと将来のビジョン】という 3 つのカテゴリーに集約した。以下、カテゴリー別に表を作成した。なお、これからの記述では、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを『』、コードを〈〉で表すこととする。

表2 カテゴリー【寺院の運営状況】

サブカテゴリー	コード
現在、寺院運営の様子	行事活動の参加者の確保・門徒との関わり・寺族の兼業事情・近所との関わり・少子高齢化・時代の変化などに応じて、寺院も変化すべき・経済事情・寺院の兼業・男社会・女性僧侶への差別・仏事法要における変化・ご縁重視・檀家制度・新しい情報に敏感
現在、困っていること	仏教への社会意識が変化した・檀家の減少・過疎化の進展・繋がりと接点がなくなった・人寄せが困難・布教の難しさ・コロナの影響・経済面の困難・仏事法要の需要減少・門徒の争奪戦・新興宗教との競争・跡継ぎ結婚難・寺院の護持・少子高齢化・寺院の衰退・寺院の機能喪失
現在、本山への思い	末寺との認識分断・離脱する意思はない・下々によって成り立っている・本山の経済危機・お金のやり取りが唯一の繋がり・本山からの援助がない・本山への不信感・現実社会に存在感がない
現在、仏事法要以外の寺院活動	書道教室・花道教室・旅行・仏教贊歌の会・流しそうめん大会・七夕まつり・仏教婦人会の集い・こども園・老人会
昔、寺院での活動	集まりの場・教育の場

表3 カテゴリー【坊守への認識と具体的な仕事】

サブカテゴリー	コード
「坊守」とは？	寺院の留守番・寺院の広報役・寺院の守り人・みんなの手本・住職のサポート・宗教者ではなく、いい妻・住職より、寺院関係者との距離が近い存在・地域では信頼できる人・皆の聞き手・寺院の伝統を重視し、伝承する人・寺院の責任者
現在、寺院での坊守の仕事	寺族生活の世話・行事法要の準備

	と運営・雑務、寺務・接待・寺報作成・朝のお参り・布教・仏教婦人会の仕事・幼稚園の手伝い・金銭管理
昔、寺院での坊守の仕事	月忌参り・寺院の雑用・子供会・子供教室・幼稚園の手伝い・幼稚園の運営活動・お経会・接待・仏教婦人会・寺族の世話
坊守の兼業	小学校教員・茶道先生・茶道教室の運営・公文教室・会社勤め

表4 カテゴリー【寺院についての思いと将来のビジョン】

サブカテゴリー	コード
地域社会にとって寺院とは？	門徒のもの・近所の方と緊密な関係・みんなの願いによって生まれる場所・集まりの場所・心のよりどころ・繋がりの場所・縁の塊・人のために存在し、人のために近くすべき場所・お年寄りと近い存在・世代により違う・新たな運営方式・寺院も宗教も向こうから寄ってきて判断されるべき・来る人が自分の判断を持つ・寺院同士の付き合いで、出入りする場所・関係のない人には近くて遠い存在
昔、寺院はどのような場所？	集まりの場・かってに来る場所・公共施設・相談する場所・信頼できる場所・公民館・学習の場所・遊びの場所
寺院の未来ビジョン	寺院に来てもらう・足を運んでもらうきっかけづくりが大事・人寄せについて考えたい・自分ができることから繋がりを作っていくたい・昔、かかわっていた子供に期待・コツコツやればなんとかなる・葬式の簡素化が進んでいく・時代の代わりに伴わない寺院は惨

	めになる・愛される寺院になりたい・相談できる場所になりたい・財源の確保にはつきりした考えがない・大きな出費があつたらちょっと不安・寺院はなくなる・いずれ寺院が必要と感じた人のために、この場所を守りたい・自分について不安・人々の生活スタイルの変化に応じて、こっち側の接し方も変化すべき・人口減少の不安・わからない・相手がいない・門徒の家に後継ぎがいない・維持するのは大変・新たな運営方式が出てくる・少子高齢化の不安・家の崩壊、生活スタイルの変化への不安・やや希望も見えてきている・研究者への期待・財政悪化への不安・努力したいけど、方向がない・大きなお寺だけ生き残る・今までの研究について失望・寺院を安心して会話のできる場所にしたい・地域の子育て、教育支援をしたい
将来、本山への思い	本山リードの新事業への期待・教化活動の強化への期待

7. 考察

以上の研究結果を踏まえ、3つのカテゴリーをそれぞれ考察する。

7.1 カテゴリー【寺院の運営】

3つの寺院の運営状況に関しては、非常に豊かな個体差が現れている。

『現在、寺院運営の様子』については、最も言及されているのは様々な人との付き合いや繋がりである。〈門徒との関わり〉〈近所との関わり〉

〈行事活動に参加者の確保〉〈ご縁重視〉といったコードが頻繁に使用された。また、宗教は保守的な存在だとよく思われるのに対して、これから時代の変化に応じてやり方を変えるほうがいいという考えは、年代問わず研究対象者全員の共通意識になっているのは少し驚きの点である。さらに、3軒の寺院においては、寺族か寺院自体かが兼業しているところも共通している。ここで、C寺のカさんが仏教界は非常に〈男社会・女性僧侶への差別〉があると感じていると語り、それに対して、他の対象者も賛同していた。

『現在、困っていること』については、今まで多くの先行研究と大まかに一致している。まとめてみれば、〈少子高齢化〉、〈過疎化の進展〉と〈仏教への社会意識が変化した〉から由来する、〈門徒数の減少〉、〈繋がりと接点の喪失〉さらに、〈新興宗教との競争〉も加えた諸理由で、〈経済面の困難〉と〈寺院の機能喪失〉がもたらされている。しかし、それにもかかわらず、過疎化が凄まじく進んでいる中山間地域に位置するC寺以外に、寺院Aと寺院Bはいまだに粘り強く、法要仏事と自分の兼業以外にも、地域の繋がりのために、〈書道教室〉〈花道教室〉〈仏教贊歌の会〉〈流しそうめん大会〉〈七夕まつり〉が行われている。その上、こういった非宗教的な活動はほとんど、坊守が主導で行われていることも分かった。

また、現在の活動を話す際に、研究対象者は昔自坊で行われた活動を多く想起していた。「昔」という時間は対象者の話によれば、大坊守と現坊守の若いころ、つまり、現代国家になった日本における大規模な人口流動が発生する前後、主に「昭和時代」を指していることが判断できる。その時代は今より地域の人口が多いため、寺院は地域住民の〈集まりの場〉と〈教育の場〉として、広く使われたことが覗くことができた。また現在の活動と比べれば、昔の〈集まりの場〉と〈教育の場〉は明確な目的により組織されたものではなく、自然発生で形成されているゆえ、〈集まりの場〉と〈教育の場〉という曖昧な表現が使用されていると想定できる。アさんは休日に、近所の方たちが何も要件ないのに、寺院に来て、雑談していたと言う。またエさんは公民館がなかった時に、皆で会議などの話し合いする際に、勝手に本堂を使用したと言う。さらに、オさんは、遊びに来る子供が多かったので、皆を集めて劇の練習をさせたと語った。

さらに特筆したいのは、〈少子高齢化〉、〈過疎化の進展〉への感覚の差

違である。前述したように、C寺は中山間地域に位置するため、一早く少子高齢化と地域過疎化の悪影響に及ぼされ、今は頼まれた仏事があれば勤めに行くけれど、それ以外は寺院で行われる活動がほとんどなくなり、住職と坊守ともに一般企業にフルタイムで働いている。

最後に、本山との繋がりがよく言及されていた。しかしそのような会話は大体マイナスの内容となり、現実社会について、本山と〈末寺との認識の分断〉があることや、〈本山からの援助がない〉のことから信頼できない気持ちが強く見受けられている。

7.2 カテゴリー【坊守への認識と具体的な仕事】

表3が示すように、研究対象者である坊守らは、寺院の中に自分の立ち位置と役割について、複数のイメージを持っている。しかし、これらのイメージすべては、〈寺院の守り人〉を軸としていることがわかった。寺院が存続するために、僧侶により法要など宗教的行事はもちろん、その〈行事法要の準備と運営〉をするのは僧侶一人ではできない。また、寺院の掃除などの〈雑務、寺務〉や、僧侶をはじめとする〈寺族生活の世話〉をする役も欠かせない。また、僧侶は自坊の仏事以外に、他寺院の葬式への参列や、他地域への布教活動もあるため、自坊を空きにする状況も出てくる。その理由で、〈寺院の留守番〉〈住職のサポート〉〈ある程度寺院の責任者〉である坊守像が対象者全員の認識にある。〈ある程度寺院の責任者〉の「ある程度」は、坊守の仕事内容から見て、寺院の責任者の一人であることがわかるけれど、対象者全員が、それについて否定的な態度をとっていることを示す。

また、対象者全員が考えている坊守像には、寺院に来る人たちとの付き合いが重要な一部分である。〈寺院関係者との距離が近い存在〉〈地域では信頼できる人〉〈皆の聞き手〉というコードがそれを表している。こういった対象者全員共通している思い以外に、世代間の差違も現れている。

『昔、寺院での坊守の仕事』から見れば、昔、門徒⁽⁴⁾数が多い時代に、出張した僧侶の代わりに、坊守が〈朝のお参り⁽⁵⁾〉と〈月忌参り⁽⁶⁾〉をなされていた。それに加え、門徒の妻たちや、地域の女性によって構成された佛教婦人会もその寺院の坊守が主導する場合が多いため、佛教婦人会で行われる〈お経会〉のような宗教的活動も坊守が主催していた。現在門徒

減少の現状により、坊守が携わる宗教的な活動がほとんどなくなっているが、インタビューの際に、対象者たちはよく仏教の教義や、親鸞、蓮如など、真宗名僧の逸話をすることから、坊守が持つ宗教者の一面が伺える。しかし、〈ある程度寺院の責任者〉と同様に、対象者たちが自分は宗教者であることについてやや否定的な態度をとっていた。

また、『現在、寺院での坊守の仕事』と比べれば、昔には〈子供会〉〈子供教室〉についての語りが多かった。町の寺院 A 寺が現在こども園を運営しているのは、昔からの子供教育事業がきっかけであると考えられる。それに対して、より人口減少に敏感な里の寺院である B 寺と山の寺院の C 寺は、もう子供教育の提供はなくなっている。しかし今、坊守には〈寺報作成〉という仕事が増え、若い世帯の坊守が考えている坊守像には〈寺院の広報役〉があった。さらに、昔と対比的に、現在の坊守は皆兼業していることが眼立っている。その背景に、女性自立の認識変容と寺院仕事の減少があると確認できた。

7.3 カテゴリー【寺院についての思いと将来のビジョン】

『地域社会にとって寺院とは？』について、坊守たちは実に多くの考えを持っていることが確認できた。まずは、寺院という場の所有権は門徒にあると皆共通の考え方である。しかし、使用権は門徒、地域の人々さらに寺族にあるとされている。寺族は住まわせられているだけで、その場所の管理者に過ぎないと、3 寺院の大坊守とともに強く認識されていた。さらに、〈心のよりどころ〉〈繋がりの場所〉〈お年寄りと近い存在〉という 3 つの考え方も、対象者全員の会話から出現している。しかし、こういった認識は今の寺院活動からではなく、昔の寺院活動からきている。

『昔、寺院はどのような場所？』については、人が〈集まる場所〉というイメージがベースとなっている。昔の寺院は〈公民館〉のような〈公共施設〉の属性があり、住職夫婦の働きにより、地域住民にとって〈信頼できる場所〉にもなっている。その上に、集まる目的としては、〈相談する場所〉〈学習の場所〉〈遊びの場所〉が語られた。対象者全員が昔の寺院に対して肯定的な態度が示され、昔の寺院に戻りたいという気持ちは次の『寺院の未来ビジョン』に強く表れている。

『寺院の未来ビジョン』については、〈足を運んでもらうきっかけづく

りが大事〉、〈人寄せについて考えたい〉、〈自分のできることから繋がりを作っていくみたい〉という3つのコードがよく会話の中に現れた。そこから、人口減少の時代でも坊守たちは絶望せず、地域の繋がりのために、何かがしたいという気持ちを示していると考えられる。また、〈愛される寺院になりたい〉〈相談できる場所になりたい〉〈いずれ寺院が必要と感じたために、この場所を守りたい〉といったコードから、将来に向けて、彼女たちはむしろ大いなる希望を持つことがわかる。さらに〈時代の代わりに伴わない寺院は惨めになる〉〈人々の生活スタイルの変化に応じて、こっち側の接し方も変化すべき〉〈新たな運営方式が出てくる〉という変化をポジティブに見、イノベーションを期待していることには、年代間の差違も、立地の差違もなかったのが、驚きであった。しかしながら、それに対して、やはり未来への不安も漂っている。その中に、〈人口減少への不安〉〈財政悪化への不安〉〈努力したいけど、方向がない〉といったコードは最も代表的である。それらの不安を解消するために、坊守たちは〈研究者への期待〉を示していた一方、〈本山リードの新事業への期待〉〈教化活動の強化への期待〉も重ねて述べられていた。

8. 終わりに

本研究は過疎化が進んでいる地域における3つの真宗寺院の坊守を研究対象とした。彼らが認識している自坊の運営状況、坊守像、地域における寺院像について、グループインタビューの手法を用い、明らかにしようとした。

その際に、地方寺院は、寺院で行われる様々な活動と、寺院を接点としてつながっている人々の関係網によって、成り立っていることがよく理解できた。対象者の言葉で表すと、寺院は「縁の塊」である。そのために、少子高齢化と地域過疎化により、地域での人口減少は寺院に縁の減少を意味する。一方、仏教寺院における「本末制度⁽⁷⁾」は、もともと、トップに立つ本山が下々の寺院をリードしながら、サポートする意味合いがあるけれど、今は本山からのサポートがほぼなくなり、末寺との関わりが金銭の徴収だけになっていると坊守たちが失望している。つまり、これらの地方

寺院にとって、縁の減少は地域の過疎化からきているだけでなく、本山からも来ている。したがって、縁の塊である寺院は上下からの縁の減少と直面し、運営状況が悪化していくという寺院の衰退理由がはつきりと見えてきた。けれども、伝統と因習などはつきりしない理由によって、本山から離脱することは彼女たちにとって、考えられないことである。ここから、日本仏教と仏教寺院の保守的な一面が伺える。

しかし、縁の減少により困難になっている運営状況について、坊守らは簡単に絶望せず、希望と不安を持ちながら、自分が認識している坊守像に向かって、地道な活動を行っている。対象者たちが語る坊守像は「一般主婦」と「寺院の管理者」の2部分から構成している。家事をしながらも、寺院の仕事に携わり、住職の補佐役という役割を果たしているというのは坊守たちの共通認識である。それに対して、坊守たちは自分が寺院の管理者であることを否定する。「管理者ではない、ただの坊守だ」と、インタビューの中に何回も聞こえてきた。しかし、それは管理者責任の放棄ではなく、管理者という概念を「偉い人」と誤解し、謙遜の気持ちで「自分はそんなに偉くはないよ」という意味合いであると筆者は感じた。なぜかといえば、「地域における寺院像」と「寺院の将来ビジョン」について彼女たちの語りから、管理者ならではの深い思慮が読み取れるからである。

前述したように寺院は様々な縁によって成り立っているのは彼女らの共通認識である。そのために、現在、縁の減少により寺院が衰退しているので、縁を取り戻せば、寺院はもう一度生命力に満たされる可能性があると坊守たちが考えている。そのために、昔のような人が集まり、元気な寺院に戻るにあたって、「寺院に足を運んでもらうにはどうすればいいか」、「時代と社会が変化しているから、寺院はどう変化すべきか」など、インタビューの中で、筆者は何回も、坊守という名の寺院管理者に鋭く質問された。そこから、坊守たちの管理者の責任感と無自覚な再帰性が見出せると言は判断する。

坊守たちにとって、寺院の持つ社会的役割は関係者のネットワークと地域のネットワークの接点であり、かかわってくる人の心のより所である。また、坊守は寺院という「縁の塊」を管理し、またそれを大切に思い、伝承し、広げようとする人であるという見解を本研究の結論とする。

第二次世界大戦後、日本社会は全面的かつ素早い発展を成し遂げた一方、

人口の移動性と個人化といった現代社会の特徴も顕在化された。それとともに、昔の「人一家→村」という重層的な伝統社会が解体され、一人暮らし、核家族という新たな生活様式は主流になっていく。こういったライフスタイルにおける変化は個人を土地、血縁、距離感の欠如した人間関係から解放するが、助け合いの繋がりと伝統的価値観の崩壊も意味する。

また、産業化が進んだ現代社会では、分業が発達し、個人は義務に追われ、仕事に多大な時間を捧げている。そのために、家族と同僚以外の友人関係が乏しくなり、自分らしく行動するどころか、自分らしさとは何かと思考する時間さえ足りない。いざ時間の余裕ができれば、他者とコミュニケーションをとるより、自分のために時間を使用したい。我々は今までにないくらい他人に依存しているのに、今までにないくらい自分が所属する集団しか知らない。誰でも自分の蛸壺に居住し、サービスもさらに個人に特化され、全員がストレンジャーであるような社会ができてしまう。この状態がさらに進んでいくと、少子化、過労死、自殺率の高騰、孤独死などの社会問題ともつながっていく。

繋がりの弱化している社会現状を改良するために、草の根レベルの活動は近年注目を浴びている。しかし、そういった活動は個人や小規模組織が主導する場合が多く、公益的な一面もあるため、資金調達と場所の確保に困っている声もよく聞こえる。また、地域の外から来た団体が活動する場合、地域住民との間に相互理解は不足しているために、活動の継続が難しくなっていることもある。こういった場合、地元によく知られている場所である仏教寺院はより容易に人を集めができ、安い場所の提供ができるため、そういった活動は寺院と連携すれば、問題解決の可能性が見えてくると筆者は考えている。

さらに、今回の調査から分かるように、規模が縮小しているにもかかわらず、寺院における「集まりの場」という社会的機能はまだ働いている上、寺院の一管理者である寺庭婦人たちは、その機能を認め、成長させようとも考えている。こういった管理者の気持ちとビジョンは必ず組織にポジティブな影響を与えることは経営学の領域ですでに広く認識されている (Drucker 1973; 占部 1975; バーナード 1968; 古川 1984)。

そのため、日本社会における繋がりの修復、さらに共生社会の形成には、仏教寺院の参入が助力になると期待できる。

もちろん、本研究は单一宗派で、わずか 6 名の寺庭婦人を対象にしているため、一般化することには限界がある。しかし、寺院の内部に存在しているが、見過ごされやすい「寺庭婦人」は、自分自身の役割、さらに寺院の社会的役割についての思い考えを明らかにした点は非常に意義がある。これからも引き続き、寺院の社会的役割について、多宗派多種類の当事者に聞き取り調査を行い、生の声、現場の声を重んじて研究を進めていきたい。

謝辞

本研究を行うにあたって、ご協力していただいた坊守たち、寺院関係者の方、そしてご指導をくださった稻場圭信先生と稻場研究室の皆様に深謝いたします。特に A 寺の大坊守さんから「私長生きして、この子、将来の活躍を見たいわ」といわれ、論文をまとめている際に何回も思い出し、励まされました。これからも皆様の期待に応えるように、現場に密着しながら研究を行い、現場に伝わる手段で発信していきたいと存じます。

注

- (1) 以下、「浄土真宗」を「真宗」と略する。
- (2) 国土交通省（編）2008「北陸圏における真に暮らしやすい連接型都市圏の形成の推進調査報告書」、国土交通省・北陸圏における真に暮らしやすい連接型都市圏の形成の推進調査第2回調査検討委員会（編）2009「北陸圏の特徴」、日本銀行金沢支店（編）2021「北陸地域の金融経済の特徴」により。
- (3) 本論文を作成した後に、B 寺のエさんと 3 回電話により、内容確認を行った。
- (4) 真宗では檀家のことと一般的に「門徒」と呼ぶ。
- (5) 朝に本堂で本尊である阿弥陀如来へ礼拝すること。
- (6) 毎月に亡くなった門徒のご命日にあわせて、そちらの家に行われる供養のことである。
- (7) 橋本（2016）によれば、戸幕府は寺院に対する統制を強化するために、「本末制度」を導入し、すべての寺院を「本山-末寺」というピラミッド構造のシステムに編入するように命じた。さらに、幕府は各宗派の総本山を支配下に置くことによって、ほぼ完璧に全国民を支配することができたという。本末制度の中身としては、宗派の根本となっている総本山、宗祖ゆかりの大本山を筆頭とし、以下、本寺・中本寺・末寺といった寺院が位置付けられ、階層を成している。ここでの末寺は、ほぼ「檀家寺」を指している。

参照文献

- Drucker, Peter. 1973. *Management: Tasks, Responsibilities, Practices*. New York: Harper & Row.
- 安梅 勅江 2001 『ヒューマンサイエンスにおけるグループインタビュー法』 科学的根拠に基づく質的研究の展開』 医歯薬出版。
- 占部 都美 1975 『新経営者論』 ダイヤモンド社
- 遠藤一 2000 『仏教とジェンダー: 真宗の成立と「坊守」の役割』 明石書店。
- 稻場 圭信・櫻井 義秀編 2009 『社会貢献する宗教』 世界思想社。
- 井上 智代・渡辺 修一郎 2015 「農村における健康に資するソーシャル・キャピタルの質的分析——高齢者へのグループインタビューを通じて——」『日本農村医学会雑誌』 63(5):723-733。
- 櫻井 義秀 2011 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』 1(1):27-51。
- 櫻井 義秀・川又 俊則編 2015 『人口減社会と寺院』 法藏館。
- 小川 有閑 2019 「地域における寺院の社会的責任—月刊『地域寺院』を資料として—」『地域構想』 1:109-116。
- 木越 康・東館 紹見・山下 憲昭・徳田 剛・藤枝 真・藤元 雅文 2017 「地域社会と寺院の抱える問題点の研究: 課題と分析視角」『真宗総合研究所研究紀要』 35:1-21。
- 北川 順也 2011 『お寺が救う無縁社会』 幻冬舎ルネッサンス。
- 窪田 和美 2006 「真宗寺院における住職と坊守の役割: 第8回宗勢基本調査からみる坊守の多面的活動」『龍谷大學論集』 468:118-146。
- グレッグ 美鈴 2007 「質的記述的研究」 グレッグ 美鈴・麻原 きよみ・横山 美江編著 『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方—看護研究のエキスパートをめざして』 pp:54-72、医歯薬出版。
- 島田 裕巳 2010 『葬式は、要らない』 幻冬舎。
- 清水 海隆 2003 『考察仏教福祉』 大東出版社。
- 鈴木 晋雄 2022 「現代における寺庭婦人のあり方をめぐって—これまでの議論とこれからの課題—」『現代密教』 31:75-96。
- 高石 史人 2005 『仏教福祉への視座』 永田文昌堂。
- 手打 明敏・原 さゆり 2014 「住民活動の拠点としての寺院の現代的意義-東日本大震災後の地域復興における寺院の役割を通して-」『茗渓社会教育研究』 5:2-17
- 趙 梦盈 2019 「日本における仏教寺院の経営革新」『龍谷ビジネスレビュー』 20:17-281。
- 長上 深雪編 2012 『仏教社会福祉の可能性』 法藏館。

- 中島 隆信 2005『お寺の経済学』東洋経済新報社。
- バーナード・チェスター1968『経営者の役割』山本 安次郎訳、ダイヤモンド社。
- 藤森 雄介 2014『仏教福祉実践の轍』淑徳大学長谷川仏教文化研究所。
- 朴 景善・王 文潔・孫 雪瑩・稻場 圭信 2018「地域における寺院の社会貢献：熊本県宇城市豊野町の光照寺の防災・復興活動を事例に」『宗教と社会貢献』8(1):101-127。
- 朴 光駿 2012『仏陀の福祉思想』法藏館。
- 橋本 英樹 2016『お坊さんが明かすあなたの町からお寺が消える理由』洋泉社。
- 古川 榮一 1948『新経営者—経営者論の展開』森山書店。
- フリック・ウヴェ 2016『新版 質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論』小田博志監訳、春秋社。
- マーガレット・サンデロウスキー2013『質的研究をめぐる 10 のキークエスチョン —サンデロウスキーローマンに学ぶ』谷津 裕子・江藤 裕之訳、医学書院。
- 秋田 光彦 2011『葬式をしない寺：大阪・應典院の挑戦』新潮社。
- 松本 勇輝 2017「葬儀業界の現状」『第37回消費者契約法専門調査会 資料 5-1』。
- 三沢 謙一 1987「役割理論の展開」『評論・社会科学』33:77-89。
- 水月 昭道 2016『お寺さん崩壊』新潮社。
- 三友 量順 2011『仏教文化と福祉：普遍思想の視点から』大法輪閣。
- 宮城 洋一郎 2013『宗教と福祉の歴史研究：古代・中世と近現代』法藏館。
- 村社 卓 2018「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性—ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析—」『社会福祉学』58(4):32-45。
- 横井 桃子 2012「はたらきかたと役割受容感—住職と坊守の寺院活動—」『宗教と社会』18:35-47。
- 三沢 謙一 1987「役割理論の展開」『評論・社会科学』33:77-89。
- 国土交通省（編）2008「北陸圏における真に暮らしやすい連接型都市圏の形成の推進調査報告書」
<https://www.mlit.go.jp/common/000054050.pdf> (2022/8/1 アクセス)
- 国土交通省・北陸圏における真に暮らしやすい連接型都市圏の形成の推進調査第2回調査検討委員会（編）2009「北陸圏の特徴」
<https://www.mlit.go.jp/common/000054099.pdf> (2022/8/1 アクセス)
- 日本銀行金沢支店（編）2021「北陸地域の金融経済の特徴」
<https://www3.boj.or.jp/kanazawa/kouhyou/tokucho/hoku.pdf> (2022/8/1 アクセス)
- 文化庁（編）2021「宗教年鑑令和3年版」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenk

[an/pdf/r03nenkan.pdf](#) (2022/7/20 アクセス)